

- (Coleoptera, Endomychidae) with descriptions of new genera and species from South America. *Revue Suisse de Zoologie*, 97(3), 705-728.
- Sasaji, H., 1986. Systematic position of the genus *Eidoreus* Sharp (Coleoptera: Clavicornia). Papers on entomology presented to Prof. Takehiko Nakane in commemoration of his retirement *Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology*, (2), 229-235.
- 佐々治寛之, 1987. テントウダマシ科とその周辺の分類体系. 福井虫報, 1, 44-51.
- Sasaji, H., 1991. Contribution to the taxonomy of the superfamily Cucujoidea (Coleoptera) of Japan and her adjacent districts, VI. *The Memoirs of the Faculty of Education, Fukui University Ser. II (Natural Science)*, 41, 11-25.
- Sen Gupta, T. and Crowson, R. A., 1973. A review of the classification of Cerylonidae (Coleoptera, Clavicornia). *Transactions of the Royal Entomological Society of London*, 124, 365-446.
- Sharp, D., 1885. On some new species and genera of Coleoptera. *Scientific Transactions of the Royal Dublin Society*, 3, 146.
- Sharp, D. and Hugh, S., 1908. Fauna Hawaiiensis or the zoology of the Sandwich (Hawaiian) Isles volume III, Part V. Coleoptera III, Cambridge 367-579 pp. XIII-XVI pls., 415p.
- Tomaszewska, K. W., 2000. Morphology, phylogeny and classification of adult Endomychidae (Coleoptera; Cucujoidea). *Annales Zoologici*, 50, 449-558.

(埼玉県川越市 亀澤 洋)

御蔵島におけるシラホシカミキリ属 2 種の後食植物

高桑正敏¹・岸本年郎²・岸田泰則³・須田真一⁴

¹ 神奈川県立生命の星・地球博物館

² (財) 自然環境研究センター

³ 日本蛾類学会

⁴ 東京大学

伊豆諸島御蔵島におけるシラホシカミキリ属 *Glenea* Newman としてはシラホシカミキリ伊豆諸島中南部亜種 *G. relictica izuinsulana* Fujita とリュウキュウルリボシカミキリ伊豆諸島亜種 *G. chlorospila hachijonis* Matsumura et Matsushita の 2 種が分布して個体数もきわめて多く、後食対象は一般に前種がアジサイ類(ユキノシタ科)、後種がブドウ類(ブドウ科)とアジサイ類の生葉と知られている(草間・高桑, 1984 ほか)。筆者らは「東京都の保護上重要な野生生物種」調査の一環で 2010 年 6 月 12 ~ 14 日と同年 7 月 4 ~ 6 日, 7 月 19 ~ 21 日に現地を訪れた際、上記シラホシカミキリ属の新たな後食対象植物を確認できたこと、また既知の後食対象植物についても明らかとなった興味深い点があるので、それらについて発見状況などを添えて報告しておきたい。

(1) 新たな後食植物について

最初の観察は 6 月 13 日, 御蔵島南西部に位置する南郷付近の, タマアジサイとガクアジサイ, ハチジョウイチゴ, カラムシ, ラセイタソウ, アシタバ, アザミ類などの低木・多年草草本が混生する崖に面した道路脇であった。筆者らの 1 人, 岸田がラセイタソウ葉上からいくつものシラホシカミキリとリュウキュウルリボシカミキリを発見したが、既知の後食対象のブドウ科でもユキノシタ科でもなかったのもそれ自体に疑問をもった高桑と岸本らが調べたところ, タマアジサイとともにラセイタソウ(イラクサ科), ハチジョウイチゴ(バラ科)に後食痕を認めた。後食痕はタマアジサイとラセイタソウにより多く, ハチジョウイチゴはより少なかったが複数の個体で確認できた。一方, タマアジサイと同科同属のガクアジサイからは後食痕を発見できなかった。続いて 7 月 5 日, やはり南郷付近で高桑と須田がオオムラサキシキブ(ク

マツヅラ科) 1個体に少数の後食痕(写真)と、葉上に2種を発見した。高桑は7月19日に同場所付近でノブドウとエビヅル(ともにブドウ科)からも多くの後食痕を認めた。このとき多数生育するカラムシも調べたが、明らかに後食痕と思えるものはまったく見つからなかった。

御蔵島西～南西部のボロ沢～黒崎高尾間も高桑によって少しだが調査された。まず7月4日、タマアジサイから多数の成虫2種(リュウキュウリボシカミキリは多かったがシラホシカミキリはやや少なかった)を発見するとともに、ラセータソウからも2種(リュウキュウリボシカミキリは多数だがシラホシカミキリは少数)を認め、中にはひどく後食を受けてほぼ葉脈だけを残す状態となった葉もあった。ハチジョウイチゴ上にも多少の後食痕を認め、さらに2ヶ所でオオシマザクラ(バラ科)の下生えからも少ないが後食痕を認めた。7月20日も少し調べたところ、カミキリ2種は相当数を目撃した(ほとんどタマアジサイ葉上)ものの、ノブドウとエビヅル以外に新たな後食対象植物は発見できなかった。なお、ここでもガクアジサイからは明らかな後食痕は見つからなかった。

御蔵島北部の里集落周辺も高桑によって7月6-7日、20日に少し調査された。後食痕はやはりタマアジサイにもっとも多く、ガクアジサイからは明らかなものは認められなかった。ブドウ科では新たにツタから発見され、エビヅルにはひどく被害されたものもあった。また、ラセータソウとハチジョウイチゴから多少とも後食痕を認めた。

以上、御蔵島産シラホシカミキリ属2種の新たな後食植物として、ラセータソウ、ハチジョウイチゴ、オオムラサキシキブ、オオシマザクラを記録する。これらのうち、ラセータソウとハチジョウイチゴは島内の各地で後食痕を確認できたので、普遍的に後食対象となっているものと推定される。ただし、後食中の個体を確認したわけではないので、シラホシカミキリとリュウキュウリボシカミキリの2種ともにこれら4種を後食対象としているかどうかは明らかでない。

(2) アジサイ類について

シラホシカミキリ属2種ともタマアジサイ生葉をもっとも好んで後食(裏面から後食するケースが多いようである)するらしく、ときに葉脈部分だけを残して枯死状態に至らせるほどである。また、葉ばかりでなく、葉柄部分、ときに若い枝部分も後食する。御蔵島ではとくに道路沿いで、タ

マアジサイがガクアジサイとともに優占して生育するが、ほとんどすべての場所で後食痕が発見できた。なお、2種はしばしばタマアジサイの同一の個体から確認されるが、個体数としては一般的にシラホシカミキリよりもリュウキュウリボシカミキリの方が多い。

一方、タマアジサイと混生して多数生育するガクアジサイには、筆者らの観察に限れば、明らかな後食痕はまったく発見できなかった。少なくとも、線状となった後食痕は1つも見ていない。これは高桑による2010年の三宅島での観察結果とまったく同様である。また、御蔵島にはアジサイ属のもう1種ゴトウヅル(ツルアジサイ)が生育するが、きわめて少ないようで、後食痕を調べることができたのは唯一、道路コンクリート壁面に垂れ下った1個体だけであった。乾燥した劣悪な環境下の個体であるが、わずかながら後食痕が確認できたので、ゴトウヅルは後食対象植物と考えてよいだろう。

(3) ブドウ類について

ブドウ科は御蔵島に自生するエビヅル、ツタ、ノブドウにおいて後食痕が確認された。葉だけでなく、葉柄、先端部分の蔓も食べられているケースがあった。3種とも個体によって後食される程度が異なるようで、ほとんど後食痕が認められないものから、エビヅルとノブドウにはひどく後食されて葉が枯れかかったものまであった。なお、本科の葉上ではリュウキュウリボシカミキリしか確認していない。

(4) 考察

上記の御蔵島における後食例の観察は、シラホシカミキリ属として一括し、種シラホシカミキリとリュウキュウリボシカミキリに分けられていない。しかし、6月13日の観察でラセータソウとハチジョウイチゴ2種の葉上から両種の個体がほぼ同数確認されたこと、7月4日にはラセータソウで2種とも確認できたことから、少なくともラセータソウについては両種とも後食していた可能性が強い。またブドウ類は、後食痕の多さにもかかわらずシラホシカミキリを見ていないことから、リュウキュウリボシカミキリだけが後食している可能性が考えられる。オオムラサキシキブとオオシマザクラについては観察例が少ないため、種レベルでの考察がむずかしい。

従来は、シラホシカミキリ属2種ともに「アジサイ類」を後食すると記述されてきた。しかし、

今回の観察によってガクアジサイを後食対象としていないことはほとんど明らかになったことから、後食対象植物をタマアジサイとゴトウヅル（2種ともに後食するかどうかは不明だが）に限定するべきである。タマアジサイとガクアジサイは枝葉が一見似ているうえ、ランダムに混生しているので、

おそらく観察者にはこれまで区別されてこなかったと思われる。一方、リュウキュウルリボシカミキリは「ブドウ類」を後食することが過去の記録からもよく知られてきたとおり、在来種の3種とも好んで後食するらしい（御蔵島のブドウ科としてはほかにサンカクヅルも記録されている（里見・



図1. ハチジョウイチゴ葉上のリュウキュウルリボシカミキリ



図4. 後食痕のあるハチジョウイチゴ



図2. 後食痕のあるラセータソウ



図5. 図4におけるハチジョウイチゴの後食痕（裏面）



図3. 図2におけるラセータソウの後食痕（裏面）



図6. オオムラサキシキブの後食痕（裏面）

丸山 1963) が未確認)。

さて、今回明らかとなった知見からは、いくつかの興味深い生態が示唆される。

シラホシカミキリ名義タイプ亜種は伊豆諸島新島・利島と九州以北の日本各地に分布し、地域によって多少とも異なった樹種を後食するらしい(永幡 2008 ほか)が、南関東の低地における主要な後食対象植物はタマアジサイとガマズミ(スイカズラ科)であり、山地ではサルナシ(サルナシ科)も加わる(以上、高桑による観察)。伊豆諸島中南部亜種は南関東方面の個体群から派生したと推定される(高桑 1979)ので、本来の後食対象植物は伊豆諸島にも広く分布するタマアジサイかガマズミ属の種(シマガマズミなど:ただし後食対象植物として知られていない)であったと見なすのが妥当である。そのどちらであったとしても、他科のラセイタソウやハチジョウイチゴなどに後食対象を広げたことになるが、その一方で、御蔵島ではほとんど常にタマアジサイと多数混生する同科同属のガクアジサイから後食痕が発見できないことはきわめて興味深い。

これに対し、リュウキュウルリボシカミキリは四国・九州以南に分布することから、西南日本から黒潮によって運ばれてきたと推定される(高桑 1979)。西南日本の名義タイプ亜種はブドウ類を後食対象とするので、伊豆諸島亜種も元来はブドウ類を後食対象としていたと見なされる。つまり、伊豆諸島に入ってからタマアジサイにも食性を拡大したと考えられる。さらに他科のラセイタソウやハチジョウイチゴなどにも食性を拡大したのであろうし、今回筆者らが報告した以外にもなお後食対象植物があるものと推定される。

いずれにしろ、上記シラホシカミキリ属 2 種は伊豆諸島に入ってきてから後食対象を拡大していったと考えられる。興味深いことに、2 種ともその食性拡大は植物の系統に従っていないため、ほかの要因が関与していると推定しなくてはならない。ラセイタソウをひどく後食しながら、同環境・同所的に生育する同科のカラムシから後食痕が発見できなかった事実も、タマアジサイとガクアジサイの関係に似ている。

一方、高桑は三宅島においても 2010 年 7 月 21 - 22 日に本属の後食対象植物を少しながら調査したが、御蔵島とちがってはるかに個体数が少ないためか、タマアジサイに比較的少量の後食痕を見出したにすぎず、ラセイタソウとイチゴ類からは確実な後食痕はまったく確認できなかった。しかし、御蔵島では後食痕が確認できなかったカラム

シから、坪田林道においてごく少量だが本属と思われる後食痕を確認した。以上の点からは、三宅島における観察は不十分にせよ、御蔵島における状況とは多少とも異なる可能性を暗示している。本属が含まれるトホシカミキリ族の各種においては、後食対象植物が系統と無関係なケースや地域による違いが見受けられる(永幡 2008)が、御蔵島と三宅島における場合もそうした例であるのかもしれない。

(5) 今後の課題

筆者らは御蔵島において十分な観察を行っていないまま、本報告を記した。たとえば、数種も分布するガマズミ属や、ハチジョウイチゴに枝葉がよく似たカジイチゴ(バラ科)も後食対象とするのか、ほとんど調べていない。今後は、シラホシカミキリとリュウキュウルリボシカミキリの 2 種ともにラセイタソウ、オオムラサキシキブ、ハチジョウイチゴ、オオシマザクラを後食しているか確認するとともに、さらにほかの植物を後食しているかどうか調べていく必要があるだろう。

末尾ながら、御蔵島での調査に際しては日本蛾類学会の中島秀雄博士、(財)自然環境研究センターの青木正成氏、御蔵島観光協会の小木万布氏にお世話となった。また、ラセイタソウとハチジョウイチゴを現地で同定してくれた筑波大学の出川洋介博士、持ち帰ったブドウ類を同定してくれた神奈川県立生命の星・地球博物館の勝山輝男・大西亘両氏に感謝したい。

引用文献

- 草間慶一・高桑正敏, 1984. ルリカミキリ族+トホシカミキリ族. 日本鞘翅目学会編, 日本産カミキリ大図鑑, 511-544. 講談社, 東京.
- 永幡嘉之, 2008. 木の葉を食べるカミキリムシ〜トホシカミキリ族の生態〜. 高桑正敏の解体虫書, 130-145. 華飲み会, 小田原.
- 里見信生・丸山尚敏, 1963. 伊豆御蔵島植物目録(二). 金沢大学理学部付属能登臨海実験所年報, 3, 52-58.
- 高桑正敏, 1979. 伊豆諸島のカミキリ相の起源. 月刊むし, (104), 35-40.